

# 西洋建築史圖集

三 訂 版



日本建築學會編 彰國社刊

## まえがき

日本建築学会は、昭和6年に「西洋建築史参考図集」を刊行し、戦後、昭和28年に、それを全面的に改訂した「西洋建築史図集」、昭和40年に「改訂新版・西洋建築史図集」、さらに昭和48年に、再訂版を刊行した。今回「三訂版・西洋建築史図集」は、四度目の改訂・増補である。

前版の「西洋建築史図集」の特色は、できるかぎり多数の図版を集録し、それぞれについて必要最小限の解説をつけた点であった。これは、西洋建築史の講義において、講師の実例選択の自由度を増すため、また、個々の建造物について十分な説明をする時間が得られないという実情に対処するためであった。外国の建造物に関する信頼し得るデータの収集は、多大な時間と費用を要する作業であるため、これらの方針は、各方面から大いに歓迎された。

今回の三訂版では、前版の特色をさらに充実させることを心がけ、図版において4ページ、解説においては46ページに及ぶ大増補を行った。これは、前版において、特に古代の部分の解説が簡潔過ぎたことを修正するということばかりでなく、さらに、古代建築こそ、資料の入手がより困難な分野であることを配慮した結果である。

近年の航空機やテレビの発達により、われわれにとって、世界は、20年前には予想もしなかったほど狭いものとなり、西洋建築もおどろくほど身近なものとなって、実例を見ることも、少数のものを除いて、さほど困難なことではなくなってきた。こうした変化に呼応して、若い建築家や研究者のあいだには、西洋建築史に従前以上の関心を抱く人々が増加している。こうした状況を配慮して、今回の三訂版の解説では、できる限り個々の建造物および建築家に関する代表的文献を末尾に付することにした。

本図集編集の主査は桐敷真次郎、図版の選択と配列および解説は、堀内清治（古代・イスラム）、飯田喜四郎（ビザンチン・中世）、桐敷真次郎（近世）が分担し、全体の整理統一は桐敷が担当した。なお、編集作業の全般および索引の作成に当たっては、星和彦君の多大な助力を得た。

昭和56年10月

# 目 次

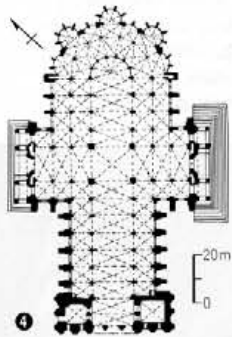
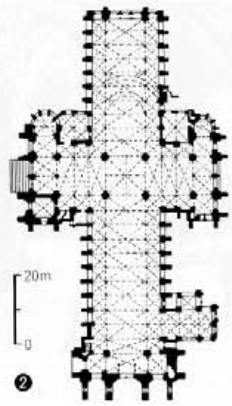
古代 1	先 史……………1	近世 1	イタリア初期ルネサンス……………51
2	エジプト……………2	2	イタリア初期ルネサンス……………52
3	エジプト……………3	3	イタリア初期ルネサンス……………53
4	エジプト……………4	4	イタリア盛期ルネサンスと マニエリスム……………54
5	エジプト……………5	5	イタリア盛期ルネサンスと マニエリスム……………55
6	メソポタミア……………6	6	イタリア盛期ルネサンスと マニエリスム……………56
7	ヒッタイト……………7	7	フランス・ルネサンス……………57
8	アッシリア・新バビロニア……………8	8	フランス・スペイン・ルネサンス……………58
9	ペルシア……………9	9	スペイン・ドイツ・ルネサンス……………59
10	ギリシア（エーゲ海）……………10	10	ネーデルランド・ドイツ・ルネサンス……………60
11	ギリシア（オーダー）……………11	11	ドイツ・イギリス・ルネサンス……………61
12	ギリシア（ドリス式神殿）……………12	12	イギリス・ルネサンス……………62
13	ギリシア（イオニア式、 コリント式神殿）……………13	13	イタリア・バロック……………63
14	ギリシア（アテネのアクロポリス）……………14	14	イタリア・バロックと 17世紀フランス……………65
15	ギリシア……………15	16	17世紀フランス……………66
16	ギリシア……………16	17	17世紀フランス……………67
17	エトルリア・ローマ……………17	18	17世紀イギリス……………68
18	ローマ……………18	19	17世紀イギリスと イギリス・バロック……………69
19	ローマ……………19	20	ドイツ・バロック……………70
20	ローマ……………20	21	ドイツ・バロック……………71
21	ローマ……………21	22	ドイツ・スペイン・バロック……………72
22	ローマ……………22	23	スペイン・バロック……………73
23	ローマ……………23	24	ロココ……………74
24	ローマ……………24	25	ロココ……………75
初期キリスト教 1	……………25	26	ロココと18世紀イギリス……………76
2	……………26	27	18世紀イギリスと ネオ・クラシシズム……………77
3・ビザンチン 1	……………27	28	ネオ・クラシシズム……………78
ビザンチン 2	……………28	29	ネオ・クラシシズム……………79
3	……………29	30	ネオ・クラシシズムと ピクチャレスク……………80
イスラム 1	モスク……………30	31	ピクチャレスクとネオ・ゴシック……………81
2	……………31	32	ネオ・ゴシック……………82
中世 1	ブリロマネスク……………32	33	ネオ・ゴシックとネオ・ルネサンス……………83
2	ロマネスク……………33	34	ネオ・ルネサンスとネオ・バロック……………84
3	イタリア・ロマネスク……………34	35	ネオ・ルネサンスとネオ・バロック……………85
4	ドイツ・ロマネスク……………35	36	19世紀後期アメリカと 世期末ヨーロッパ……………86
5	ベルギー・フランス・ イギリス・ノルウェー……………36	図版解説	古 代……………87
6	フランス・ロマネスク……………37		初期キリスト教・ビザンチン・イスラム……………135
7	フランス・スペイン・ロマネスク……………38		中 世……………146
8	フランス・ゴシック……………39		近 世……………171
9	フランス・ゴシック……………40		建造物索引……………214
10	フランス・ゴシック……………41		人名索引……………221
11	フランス・イギリス・ゴシック……………42		
12	イギリス・ゴシック……………43		
13	イギリス・ドイツ・ゴシック……………44		
14	ドイツ・ゴシック……………45		
15	スペイン・ゴシック……………46		
16	イタリア・ゴシック……………47		
17	城 郭……………48		
中世 18	地方邸宅・市庁舎……………49		
19	都市住宅・住宅……………50		

## 建築歴史・意匠委員会（昭和56年10月現在）

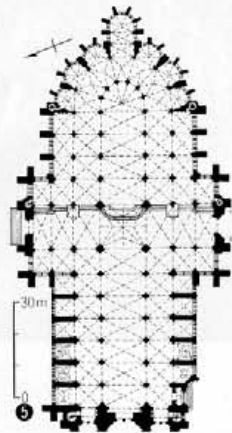
委員長	山口 廣				
幹 事	稲葉和也	前川道郎			
委 員	稲垣栄三	遠藤明久	大河直躬	草野和夫	工藤圭章
	香山寿夫	坂田 泉	坂本勝比古	沢村 仁	鈴木博之
	鈴木 充	関口欣也	土田充義	内藤 昌	永井規男
	林野全孝	平井 聖	藤本康雄	藤森照信	前野 堯
	渡部貞清				

## 建築史図集編集小委員会 西洋建築史分科会

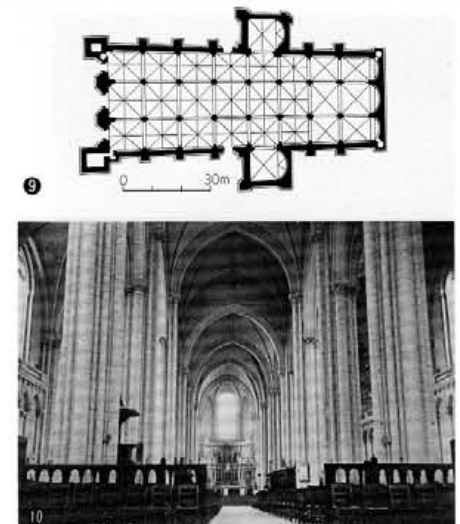
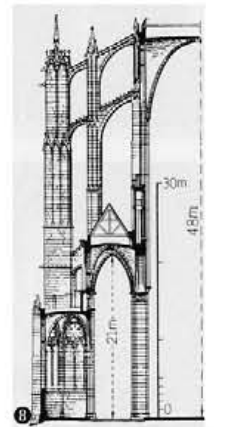
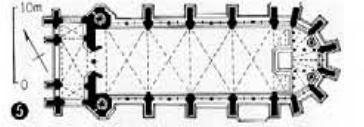
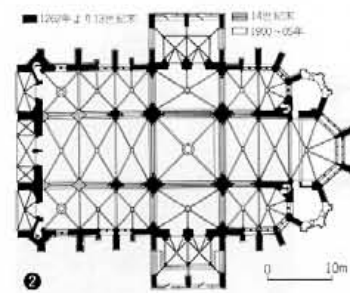
主 査	桐敷真次郎	
委 員	堀内清治	飯田喜四郎



1, 2 ラン大聖堂。1160ごろ起工, 1180ごろ内陣完成, 1220ごろ西正面完成, 1230ごろまでに内陣増改築を含む主な工事を終了  
 3 ランス大聖堂。1211起工, 41年内陣完成, 13世紀末までに外陣を完成し, ばら窓の高さまで西正面を建設  
 4, 6 シャルトル大聖堂。1194年起工, 1225ごろにはほぼ完成。交差廊の南・北正面扉口を1250ごろまでに増築  
 5, 7, 8 アミアン大聖堂。1220ごろ起工, 1245ごろ外陣を, 1269ごろ内陣を, 西正面の双塔を1410ごろ完成

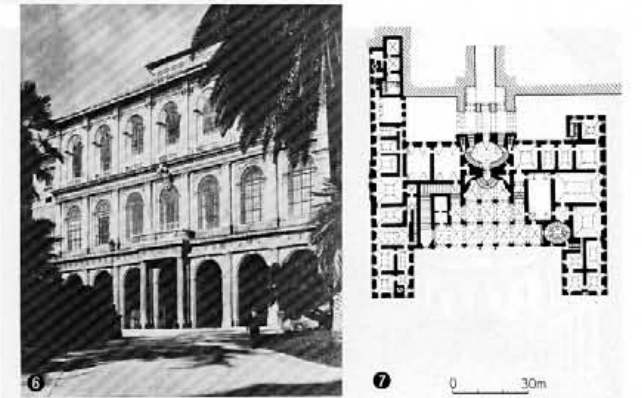
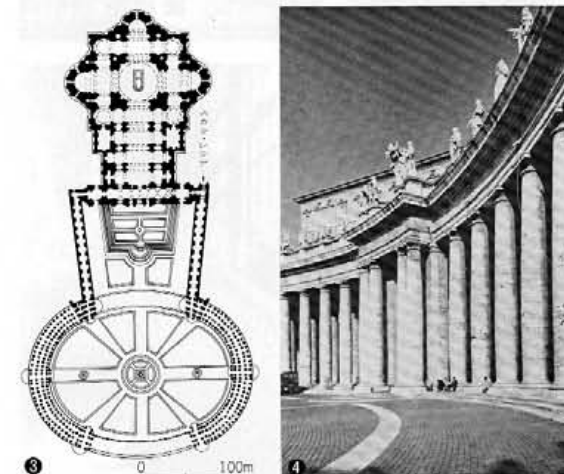
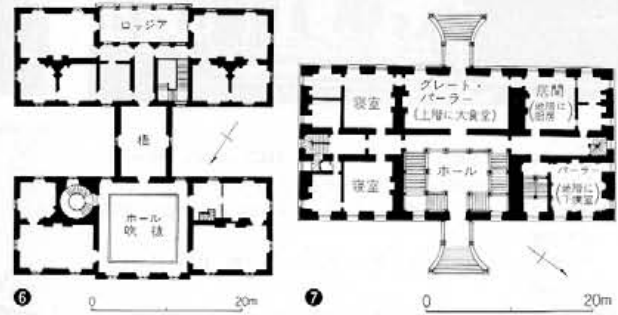
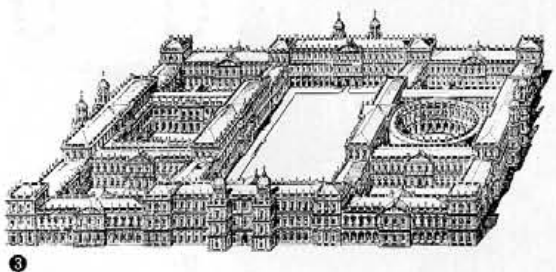


1, 4, 5 サント・シャペル, パリ。1241/42~48  
 2, 6, 7 サンテュルバン, トロワ。1262起工, 1389献堂  
 3 アンジェー大聖堂。外陣は11~12世紀, 交差廊と内陣は13世紀  
 8 ボーヴェー大聖堂。1247~72  
 9, 10 ボワチエ大聖堂。1162起工, 1200ごろに内陣, 1290ごろに外陣完成  
 11 ドミニコ会教会堂, トゥールーズ。1285ごろ~1292内陣, 1369ごろ~1385外陣完成

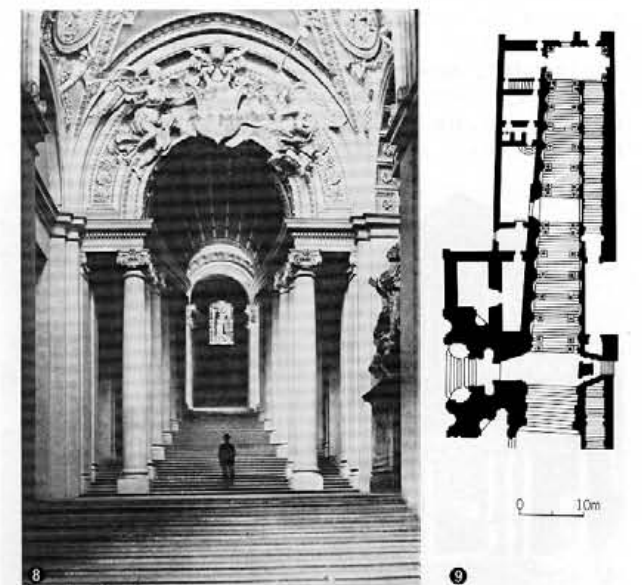




1,2 ハットフィールド・ハウス, ハートフォード県, ロバート・セシル, ロバート・リミング, 1607~11ごろ  
 3 ホワイトホール宮計案。イニゴ・ジョーンズ (1573~1652), 1638 ころ  
 4 バンゲッティング・ハウス, ホワイトホール, ロンドン。ジョーンズ, 1619~22  
 5,6 クイーンズ・ハウス, グリニッジ。ジョーンズ, 1616~35, 北面と2階平面図  
 7,8 コールズヒル, パーク県, サー・ロージャー・ブラット(1620~85), 1650ころ。1階平面図と北東面  
 9 クラレンドン・ハウス, ビカディアリ, ロンドン。ブラット, 1664~67 1683破壊



1,2,3,4,5 サン・ピエトロ大聖堂, ローマ。交差部はミケランジェロの原案により, 1564にドラムまで完成。ドームはミケランジェロの模型に基づき, ジャコモ・デッラ・ポルタとドメニコ・フォンタナが1587~89に建造。身廊部と正面はカルロ・マデルナ (1556~1629) が1606~24に建造。前面広場のコロネードはジョヴァンニ・ロレンツォ・ベルニーニ (1598~1680) が1656~67に建造  
 6,7 パラッツォ・バルベリーニ, ローマ。マデルナ, フランチェスコ・ボルロミニニ(1599~1667) およびベルニーニ, 1628~38  
 8,9 ヴァチカン宮殿のスカラ・レジア, ローマ。ベルニーニ, 1663~66



ぎないが、ここでも建物の変形を起こしたので13世紀末に飛梁を増築した。堂内のピアの柱頭彫刻と西正面扉口の彫刻、特に扉口上の最後の審判の彫刻はヴェズレー（→3）のそれと並ぶロマネスクの傑作として極めて名高い。

- J. Berthollet, Autun, Autun, 1948

38-7,8
フォントネ修道院付属教会堂, 1139～47年 Fontenay 11世紀末, シトー Citeaux に設立された修道会は 1115 年に聖ベルナルド Bernard (1090～1153) を迎えて発展し, 12 世紀後半から 13 世紀初期にかけて, クリュニー修道会（→33-5,6,38-1,4）に比肩する勢力を持ち, ローマ教会の権威を高める上に大きく貢献した。シトー修道会では, 次第に華美を競う当時の教会堂建築の傾向を全面的に否定し, 平面は単純な十字形で, 内陣は浅く, その東壁は垂直な壁面とする。教会堂内外の彫刻装飾は一切禁止し, 窓は不必要に大きくせずほとんど無装飾のガラスをはめ, 折りの妨げとなる華美な内装や調度をすべて排除した。倨傲のしるしとして石造の鐘塔は禁止され, 教会堂の西正面には簡素なポーチを設け, 交差部に小さな木造鐘塔を作るだけであった。フォントネは, 聖ベルナルドにより 1119 年に開設された修道院で, 厳しく簡素なこの教会堂（1139年起工, 47年献堂）はシトー修道会の代表的作品である。南北袖廊の東側にある各2室の祭室は, 当初隔壁で仕切られ, 各祭室で独立して同時にミサを執行できた。

- L. Bégule, L'abbay de Fontenay, Paris, 1957

38-9
ボンチニ修道院付属教会堂, 外陣は1140ごろ～70年 Pontigny シトー修道会の教会堂ではリブ・ヴォールトを積極的に採用し, 12世紀末にはその使用は一般化した。シトー修道会は各国にリブ・ヴォールトを伝え, 北フランスのゴシック建築を受け入れさせる素地を作ったと言われる。シトーの教会堂では装飾的なトリフォリウムやトリビューンを用いず, 高窓と大アーケードの簡素な2層構成とする。ボンチニはフランスに現存するシトー修道会の最大の教会堂で, 1140年ごろに内陣から着工し, 1170年ごろに外陣を完成した。天井にはすべて交差ヴォールトを架ける予定であったが, 身廊には当時用いられ始めたリブ・ヴォールトを架けるよう変更された。当時の内陣はフォントネ（→7,8）と同じく長方形平面の小さなもので, 袖廊にそれぞれ3祭室を配置していたが, 修道士数が急激増加したため, 1185年ごろから1212年かけて放射状祭室を備えたゴシック様式の広大な内陣に改築された。

- M. Aubert, Abbaye de Pontigny, Congrès archéologique de France, 1958 p. 163-168

38-10
サンチャゴ・デ・コンポステラ大聖堂, 1075～1122/24年 Catedral, Santiago de Compostela 9世紀初頭に発見されたと伝えられる聖ヤコブの墓所は 11 世紀以降, ローマ, イェルサレムと並んで西欧最大の巡礼聖地となった。現在の大聖堂は 879～96 年に作られた既存の教会堂に代わり, 1075年ごろ起工し, 1122または24年に大部分を完成した典型的な巡礼路教会堂である。西正面は前面の広場から約 7.5m 高いため, ポーチの下をクリプトとする。ロマネスク彫刻の傑作とされる扉口のあるポーチの西側は, 当初吹放しのアーケードであった。12世紀初頭から近年まで, 交差部以西の身廊4ベイは聖職者席（コロ, coro, 近年撤去された）として, 外陣の他の部分と隔壁によって仕切られていた。交差部以西に突出するコロは, サンチャゴ大聖堂から始まったと言われる（→46-1～3）。現在の正面階段は16世紀に建造されたもので, 双塔を含めて西正面は18世紀に外装を完成し, 交差廊北正面も1757～70年に全面的に改築された（→73-7）。

- S. Alcolea Gil, La Catedral de Santiago, Madrid, 1958
- V. González et B. Regal, Galice romane, La Pierre-qui-Vire, 1973, p.

87-204
サン・ドニ, 内陣は 1136 ごろ～44 年 Basilique, Saint-Denis サン・ドニは王室霊廟としての修道院付属教会堂で, 最初のゴシック建築。ジュジュール院長 (Suger, 1121～52) はシャルルマーニュの臨席のもとに 775 年に献堂された教会堂の改築を 1136 年ごろから着手し, 40年にナルテクスを含む西正面を2階の高さまで新築し, 44年までに内陣を改築した。西正面の南塔と交差廊を48年に完成し, 続いて新しい外陣を8世紀の外陣の外側に建設し始めたが, ジュジュールの没後, 新築工事はほぼ中止された。1231年ごろ, 円形断面のピア10本を含む内陣身廊の改造工事が開始され, 1245 年ごろから名建築家ピエール・ド・モントルイ Pierre de Montreuil（→41-1,4,5）により内陣の天井が架けられ, 交差廊と外陣が現在のように改築された。大革命の時に, 局部的に破壊され, 廃墟となったが, 1847年以後, ヴィオレ・ル・デュック（→82-8）により修理された。西正面北側には, 19世紀初めまで, 尖頂屋根を付けた鐘塔（1219年以前に完成）があったが, 1837～46年の誤った改築工事によって沈下を起こしたため撤去された。ジュジュール院長時代の部分としては, 西正面と2ベイのナルテクスおよび放射状7祭室を備えた周歩廊が現存する。西正面は平坦な壁面が多く, ロマネスク的な重厚さを持つが, 鐘塔を備えて昇天性強く, 三つの扉口は人像柱で飾られ, 重層アーチやティンバナムには遍書物語を彫刻して, 石のバイブルへの第一歩を示す。ナルテクスの天井ではリブ・アーチの起拱点が異なり, リブ・ヴォールトの扱い方が未熟である。内陣のクリプトではリブを用いてないが, 周歩廊と祭室の天井ではリブの長所が十分に活用されている。当時のステインドグラスは失われたが, 窓は柱間いっぱいに広がり, 壁面消失への方向が明確に打ち出されている。

・J. Formigé, L'abbey royale de Saint-Denis, Paris, 1960

・S. M. Crosby and P. Z. Blum, Le porteil central de la façade occidental de Saint-Denis, Bulletin Monumental, 1973, p. 209-266

39-3～5,8
バリ大聖堂, 1163～1250年ごろ Cathédrale, Paris 初期ゴシックの傑作。1163年に内陣から起工し, 外陣を1200年ごろに完成, 西正面を1250年ごろまでに完成した。外陣を建設中であった1180年ごろに初めて飛梁が用いられた。スパン 15m に達する内陣の飛梁は, 放射状祭室増築（1296～1320年）の時に加えられた。それ以前は 32m の高さに架けられた石造天井の推力を支持するため, 壁体の上部を鉄バンドで繋結する方法を用いていた。身廊の石造天井は6分ヴォールトだが, ピアには同一断面の円柱を用いる。これに対して側廊は4分ヴォールトだが, 外陣ではピアを強弱に変化させ, やや非論理的な形をとる。当初の堂内壁面は4層構成であったが, 1230年ごろ丸窓をあけたトリフォリウムを高窓に吸収して3層に改修した。1845年以降 ヴィオレ・ル・デュック（→82-8）により丸窓の残欠を用いて交差部に隣接する壁面に4層構成が復原された（→4）。周歩廊ではリブで三角形の格間を連結したトンネル・ヴォールトを架ける。外陣の控壁間の小祭室は1245～50年ごろに増築されたもので, 側祭室の最初の例と言われる。この時に交差廊も南北に1ベイずつ延長され, 直径13mのバラ窓を持つ美しい南北正面が作られた。西正面は, 重厚だが極めて安定した形で, サン・ドニで見られた影像で扉口を飾る手法はさらに発展しており, 旧約の王者たちの影像（19世紀の復原）が三つの扉口の上を連結する。その上のバラ窓はほとんど壁面全体に広がり, 壁面はますます減少していく。サン・ドニでは防壁上の考慮から, 鐘塔基部をめぐって鎧壁をめぐらすが, ここではレースのようなコロネードが双塔基部とその間を結んで取り付けられている。これにより塔の上部とコロネード以下の部分とは調和のとれた比例となり, 高さ16mの細い窓をつけた比較的マッシブな塔の重量感は, 巧みに軽減されている。双塔上には尖頂屋根を建設する予定であったがらしいが, 実現し

なかった。交差部の尖塔は落雷でたびたび炎上し, 現在の尖塔は19世紀に木造・鉛板張りで再建されたもので, 以前の尖塔よりも約 10m 高くなっている。

- M. Aubert, Notre-Dame de Paris, Paris, 1929
- D. Jalebert, Notre-Dame de Paris, Paris, 1948

39-7
サンス大聖堂, 1135 ごろ～68 年ごろ Cathédrale, Sens 主として1135年ごろから68年ごろに改築され, 全面的にリブ・ヴォールトを架けたイール・ド・フランス最初の大聖堂で, 12 世紀末までに内陣と外陣に飛梁を増築し, 西正面を含めて完成したが, 南鐘塔は1267年に崩壊したため 1534 年までに再建された。交差廊の南北正面は 1490～1512年に改築。身廊は幅広く（ピア真々 15.25m), ここに高さ24mの6分ヴォールトを架け, 強弱断面のピアで支持する。側廊は, 当初リブ・ヴォールトを予定してなかったらしく, リブは付け柱を持たずに持送りから立ち上がる。堂内の壁面は簡素な3層構成で, 高窓は当初幅狭く低いものであったが, 13世紀初めに壁付アーチを高く改造するとともに窓高を下げ, 現在のように拡大した。3層構成の壁面はシャルトル以後の盛期ゴシック教会堂の基本となったものである。サンスはバリ, シャルトル, オルレアンなど7司教座を統轄する大司教座であるが, サンスで用いた3層構成という壁面形式は, サン・ドニの内陣の祭室のように多数の追従作品を生むような影響力を持たなかったらしい。サンスより約30～40年遅れて起工したバリ, ランなどの大聖堂では, トゥールネ（→36-1,2）のようにトリビューンのある4層構成を採用した。ただしサンス大聖堂の工事に参加したと推定される建築家ギョーム・ド・サンス Guillaume de Sens によって再建された, イギリスのカンタベリー大聖堂 Canterbury（内陣 1174～80 ごろ）では, 3層構成を用いた。サンスの内陣は周歩廊をめぐらすが, 当初は身廊の軸線上に小祭室を一つしか設けなかった。

- E. Chartraire, La Cathédrale de Sens, Paris, 1963

39-9,40-1,2
ラン大聖堂, 1160 ごろ～1230 年ごろ Cathédrale, Laon この大聖堂は, バリと並ぶ初期ゴシックの傑作で, 西正面のほか交差廊の南北正面にもそれぞれ双塔, 交差部に大きな採光塔など, 合計7基の塔を建てる計画であった。1160年ごろ内陣より着工してこれをほぼ 1180年ごろ完成した。数年間中断したのち工事を再開し, 1220年ごろに双塔を含めて西正面を完成し, その直後に当初予定してなかった飛梁を増築した。また当初の内陣は周歩廊を持つ半円形のアブスを含めて4ベイの規模のものであったが, 西正面完成後にこのアブスを取り壊して7ベイを増築し, 東端部を平らな壁面とした。続いて交差廊の南北正面にある双塔のうち, 西側の各1基の上部を作り, 1230年ごろまでに主な工事を完了した。13世紀後半から14世紀前半にかけて, 南正面の扉口を改修し, その上のバラ窓をレイヨナン式の大きな窓に改め, 内陣・外陣の側廊に沿って多数の側廊室を増築したが, 交差部の採光塔と南北正面の東側の塔は未完成に終わった。西正面の鐘塔の一つには尖頂屋根があったが1793年に取り壊された。西正面は双塔の控壁の間に, 影像を切妻に飾った両流れ屋根の深い三つのポーチを置き, その奥に扉口を開く。その上の壁体は控壁と同じ厚さなので, バラ窓とその両側の窓は壁体を深くえぐって作られたような形になっている。バラ窓を最大限に大きくしたためその上にあるアーケードは, 左右のものより高くなり, 動的な印象を与える。双塔の上部は八角形平面の2階建て, 八角塔の四辺に, 下部2層を正方形, 第3層を多角形とする小塔を取り付ける。小塔第3層の円柱の間に牡牛16頭が刻まれているが, これは工事の資材を大聖堂のある丘上に引き上げたその労をしのいだものと言われる。13世紀前半の建築家ヴィラルール Villard de Honnecourt はこの鐘塔をどこにも見られない名作と激賞し, 平面・立面をその画像に記録している。静かなバリ大聖堂の西正面とは著しく異なり, 彫りが深くダイナミックなランの構成は, 南北正面

にも双塔を置く多塔形式とともに後世の建築に強い影響を与えた。堂内の壁面は創建当時のバリ大聖堂と同じく4層構成で, 天井にも6分ヴォールトを架けた。バリでは当初トリフォリウム到高窓やトリビューンの形とは無関係な円形の開口部を作ったが, ここでは4層ともアーケードをモチーフとする均一なデザインでまとめあげている。

- L. Broche, La Cathédrale de Laon, Paris, 1961

39-10, 11
アミアン大聖堂外陣断面とランス大聖堂外陣の内壁立面 アミアンとランス（→40-3,5,7,8）は典型的な盛期ゴシックの教会堂で, 内壁面は大アーケード・トリフォリウム・高窓の3層構成である。パリやランのような12世紀後半の教会堂では, 身廊のヴォールトを支持しやすくするため, 側廊を2階建としたので, 堂内の壁面は小さな高窓のある4層構成であった。飛梁の有効性が理解されてからは, 側廊を平屋建とし, 高窓の高さを大きくするとともに幅も柱間全体に広げて, ここにステインドグラスをはめた。もちろんヴォールトの推力の大きさも作用点も正確に知ることができないので, 飛梁を上下3段まで架けてもヴォールトを安全に支持できなかった場合もある。しかし全体として石積み構造は13世紀には極めて高い水準に達し, アーチとピアの組合せによる骨組構造を完成している。ステインドグラスは, ロマネスクの壁面に代わって聖書や聖話などの図像により, 扉口の彫刻とともに文盲の信徒に対して教化の役割を果たすと同時に, 透過する美しい光線によって堂内を崇高で神秘的な雰囲気にする。ステインドグラスへの愛着は, トリフォリウムも高窓に取り込もうとする傾向をおこし, トリフォリウムは圧縮され, あるいは消滅し, 内壁面は高窓と大アーケードだけの2層構成にまで変化した。初期ゴシックの窓は一般にトレイサリーを用いないが, 使用する場合も板石をくり抜いたごく簡単なもの（plate tracery という）であった。盛期ゴシックでは円を基本とした放射状の美しいトレイサリーを用いているので, この時期の作品をレイヨナン式 rayonnant と呼ぶ。14～15世紀には, 曲線・反曲線を組み合わせ, 火災の立ち上がるような形のトレイサリーを用いているので, フランポワイヤン式 flamboyant と呼ぶ。

40-3
ランス大聖堂, 1211～13世紀末 Cathédrale, Reims（→39-11）ゴシックの女王と称されるレイヨナン式の傑作で, 全長 138.7m, 身廊の幅 15m（ピア真々), 天井高さは 38m におよぶ。ロマネスクの大聖堂が1210年に炎上したため, 翌年内陣から再建に着手し, 1241年に内陣, 1375年ごろに外陣を完成し, 西正面を第2層まで建設した。その後, 工事の速度は遅くなり, 1350年ごろに第3層（諸王のギャラリー）を完成した。1400年ごろ双塔上部の工事に着手したが百年戦争に妨げられ, 1475年ごろによりやく現在の高さまで鐘塔を築いたが, 尖頂屋根は未完成に終わった。外陣は3廊だが, 内陣は戴冠教会堂なので5廊の規模とし, 内陣の聖職者席は外陣に2ベイも突出する。西正面はバリ大聖堂の水平・垂直区分の手法とラン大聖堂の彫塑的な構成を組み合わせ, 各部分についてさらに垂直性を強調すると同時に軽快さを増すために開口部を広くとる。大聖堂は破風やビナクルを頂くフェディクトラの中に立つ大形の影像を含めて, 約2000個の影像や彫刻された動物で華麗に埋め尽くされている。西正面の扉口や破風の影像は極めて精巧で, ロマネスク時代のように建築が指定した空間に適応するように無理な形をとらず, 人像として自由な形となり, 次第に建築から独立する傾向を示す。また鐘塔頂部のように高所に置かれた影像は, 正面全体のデザインとして必要だが遠くから眺められるだけなので, 非常に大きくても彫刻作品としてはあまり重視せずに制作されている。1914年の西正面の足場火災と第一次大戦の砲撃により, 特に彫刻部分は著しく焼損し, 修理工事は1937年まで続けられた。

- H.Reinhardt, La Cathédrale de Reims, Paris, 1963
- F. Salet, Chronologie de la cathédrale, Bulletin Monumental, 1967, p. 347-394
- J.P. Ravaux, Les campagnes de construction de la Cathédrale de Reims au XIII<sup>e</sup> siècle, Bulletin Monumental, 1979, p. 7-66